

讃 美

速水清隆 (宗教委員長 / 人文学科教授)

「先生にとって、音楽とは何ですか？」1年近く前、チャペルで讃美歌を歌う奉仕を続けてきてくれた学生が私にそう問い掛けた。唐突に尋ねられたのであるが、その問いにより、私自身の音楽との関わりについて振り返り、そして、讃美について、改めて考える機会を与えられた。

それに対し、私は自分がどのように音楽と歩んできたかを回顧し、次のように答えた。

まだキリスト教を知らない時代、イエス・キリストと出会う以前は、ギターを奏でたり、歌を歌うことは、私にとって、自分を楽ませることであり、自分を慰めることであった。しかし、キリストを知った後は、全く方向性を変えられた。自分に向かっていただけのものから、神への方向転換がなされた。それは、讃美の姿勢を知らされたからである。不十分ではあるが、その後の私にとっては、神を崇めるために、神を頌(ほめ讃(たた)えるために、音楽がある。それが讃美である。

自分のために、自分に向かって歌っていたときは、あるいは、人に向かって歌っていたときも、確かに楽しむことができていたし、慰められた気になってはいたが、それはあくまでも一時的なものであり、まやかさに過ぎない。神に向かって讃美したときにこそ、自分自身をも真に慰められるし、まことの喜びが与えられる。時に、讃美をすることが苦しくなることもあった。しかしそれも、その後に備えられた喜びのための試練であった。また、自分自身の讃美の方向性をいつしか見失っていたときに、その誤りを訂正するために、そうした苦痛を神が与えてきてくださった。

毎日のチャペルアワーにおいて、清泉礼拝堂聖歌隊によって、讃美のリードを頂いてきた。隊員が一つの方向性を持って、神に向かって声を合わせ、パイプオルガンによる奏楽とともに、背後から導き続けてくれた。心より感謝をしたい。しかし、聖歌隊は4月当初、たった一人から歩みを始めたのであった。先の問いに対する私の答えや奨めも空しく、3年間の歩みをしてきた聖歌隊は振り出しからのスタートとなった。1年の歩みを今終えようとするとき、そうした試練も大きな恵みであったことを覚える。そして、聖歌隊は、原点に立ち返り、真の讃美を求めて、更にこの1年間、一層の豊かな育みが与えられてきたことを、神に感謝し、いよいよの讃美の声をあげたい。

主に向かって喜び歌おう。 救いの岩に向かって喜びの叫びをあげよう。

御前に進み、感謝をささげ 楽の音(ね)合わせて喜びの叫びをあげよう。

主は大いなる神 すべての神を超えて大いなる王。

(旧約聖書 詩編 95 編 1~3 節)

769-2401

1010-7

0879-42-4481

4

4

1

1

1

1

1

3

3

4

3

4

